

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第 21 集

1 9 9 3

宇治市教育委員会

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第 21 集

1 9 9 3

宇治市教育委員会

序

近年、宇治市では、宅地開発や道路建設があいつぎ、それに伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査が増加しています。

本書は、宇治市教育委員会が平成4年度に行いました、開発事業に伴う緊急発掘調査の概要をまとめたものです。

平成4年度に行いました緊急発掘調査は6件です。このうち本書では木幡神社遺跡と西浦遺跡の2件について収録しています。その中で、西浦遺跡の調査では、古墳時代から近世にいたる集落の遺構を発見し、木幡池のほとりにも古代集落が展開していたことがわかりました。

本書が多くの方々の目にふれ、広く宇治の歴史解明に役立つ事を願うものです。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた開発事業者の方々をはじめ、調査期間中にご協力いただきました関係機関ならびに各位に心よりお礼申し上げます。

平成5年3月

宇治市教育委員会

教育長 岩本昭造

例 言

1. 本書は、宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第21集である。
2. 本書が収録する調査は、平成4年度に本市教育委員会が開発事業にともない実施した発掘調査である。収録する調査は下記の2件である。

番号	遺跡名称	調査地	調査原因	経費負担者	調査期間	調査面積
1	木幡神社遺跡	宇治市木幡東中	公民館建設	宇治市	平成4年 4月～5月	108㎡
2	西浦遺跡	宇治市木幡西浦	共同住宅建設	陸備建設株式会社	平成4年 7月～9月	950㎡

3. 本誌が収録する発掘調査の組織は下記のとおりである。

調査主体者	宇治市教育委員会					
調査責任者	宇治市教育委員会	教育長		岩本昭造		
調査担当者	同	社会教育課	主事	杉本宏		
	同	社会教育課	主事	荒川史		
調査事務局	同		参事	頼成綾子		
	同	社会教育課	課長	池田正彦		
	同	社会教育課	文化係長	吉水利明		
	同	社会教育課	主任	山本敦子		
調査指導	京都府教育委員会・京都府立山城郷土資料館					
調査参加者	今井聡子・今西礼子・久保千恵子・志村みどり・瀬谷正志・立花かおり・西村 恵祥・長谷川陽子・浜中邦弘・福島孝行・水谷美穂・宮川千代実					

4. 本書の編集は宇治市教育委員会社会教育課が行ない、編集実務は荒川が、執筆はⅡ-(1)を西村恵祥(龍谷大学学生)が、その他を荒川が担当した。

本文目次

I. 木幡神社遺跡発掘調査概要

1. はじめに	1
2. 調査の概要	3
3. まとめ	3

II. 西浦遺跡発掘調査概要

1. はじめに	4
2. 調査の概要	6
3. 遺物	14
4. まとめ	21

挿図目次

I. 木幡神社遺跡発掘調査概要

第1図 調査地位置図 (1:5,000)	1
第2図 トレンチ実測図	2

II. 西浦遺跡発掘調査概要

第3図 調査地位置図 (1:5,000)	4
第4図 トレンチ配置図	5
第5図 トレンチ断面柱状図	6
第6図 トレンチ平面図	7
第7図 SB01実測図	9
第8図 SK14実測図	11
第9図 SD06断面図	12
第10図 SD08・SD09実測図	13
第11図 SB01出土遺物実測図(1)	15
第12図 SB01出土遺物実測図(2)	16

第13図	遺物実測図	18
第14図	遺物実測図	19
第15図	遺物実測図	20

図 版 目 次

木幡神社遺跡

- 図版第1 (1) トレンチ全景 (東から)
 (2) トレンチ東部の状況 (東から)

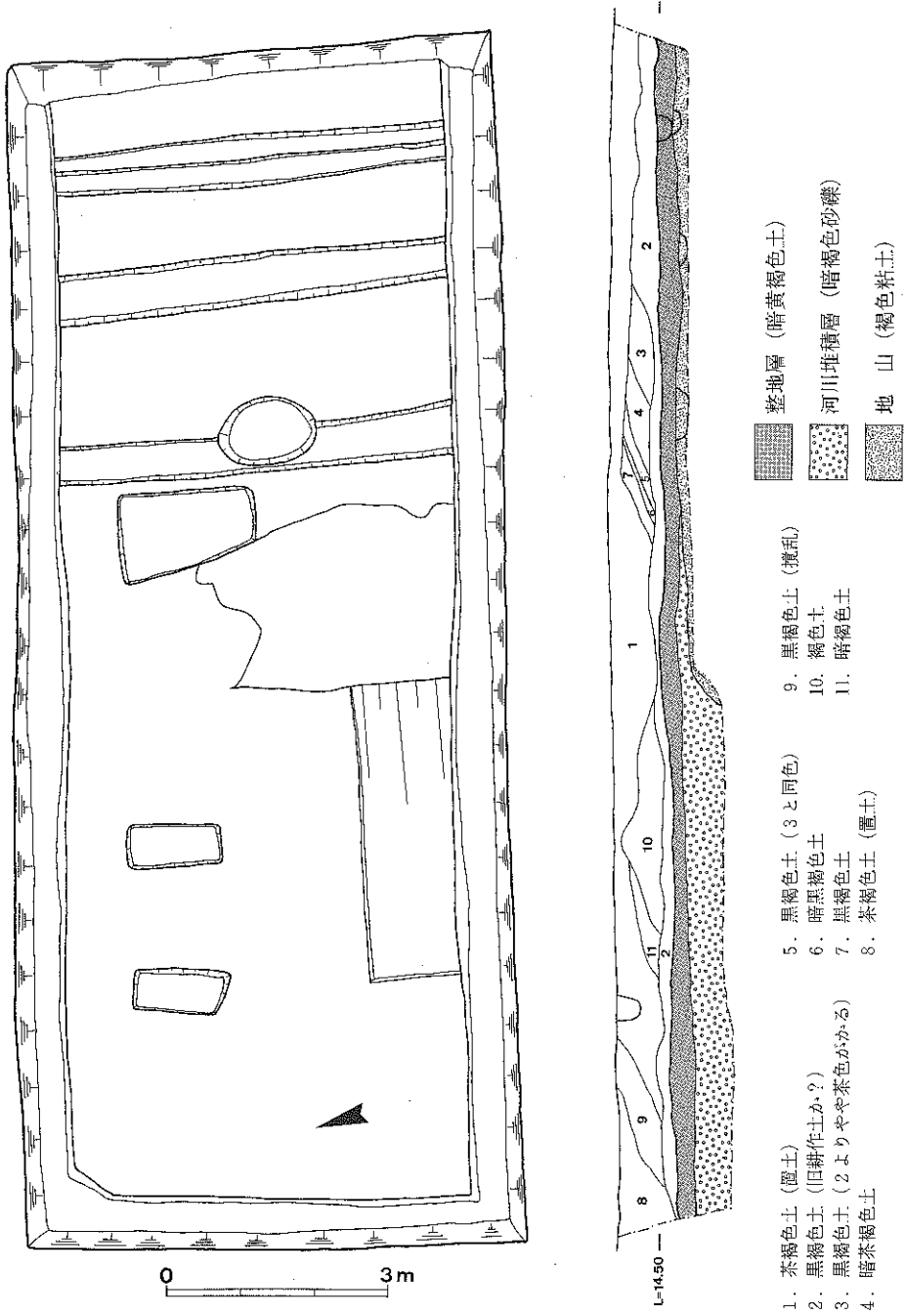
西 浦 遺 跡

- 図版第2 航空写真
- 図版第3 (1) 調査前の状況 (東から)
 (2) トレンチ主要部完掘状況
- 図版第4 (1) トレンチ全景 (東から)
 (2) トレンチ主要部全景 (南から)
- 図版第5 (1) SB01全景 (南東から)
 (2) SB01完掘状況 (東から)
- 図版第6 (1) SB01カマド付近の状況 (南から)
 (2) SB01収納ピット土器出土状態 (南から)
- 図版第7 (1) SK14全景 (南から)
 (2) SK14遺物出土状態
- 図版第8 (1) A地点土器出土状態
 (2) B地点青磁碗出土状態
- 図版第9 (1) SD08全景 (南から)
 (2) SD09全景 (南から)
- 図版第10 出土遺物(1)
- 図版第11 出土遺物(2)
- 図版第12 出土遺物(3)
- 図版第13 出土遺物(4)



収録遺跡位置図

I. 木幡神社遺跡発掘調査概要



第2図 トレンチ実測図

2. 調査の概要

調査地はかつて木幡公民館が建っていたところで、調査前の状況は平坦地となっていた。調査は6.5m×16.5mのトレンチを設定し、重機により掘削を行った。その結果、トレンチ東半部では30～40cmの、西半部では約70cmの盛土があることがわかった。そして盛土の下には全面にわたって旧耕作土があり、このことから公民館が建つ以前は畑地であり、盛土は公民館の建設に伴うものであることがわかった。

遺構は耕作土の下層で検出し、主にトレンチ東半部に集中していた。遺構面は2面確認したが、出土した遺物からいずれも近世以降の時期であろう。検出した遺構の多くは幅30cm～60cm、深さ10cm程度の南北方向の溝で、近世以降の耕作溝と考えられる。

また、明確な遺構としては確認できなかったが、トレンチ中央において火を受けた跡のある硬質な面を検出した。これは、何らかの建物に伴う整地面と考えられ、付近に建物があった可能性が高い。

トレンチ西半部については、地山面が西に向かって落ちていく状況が確認できた。この部分については地下水の湧出が激しく途中で掘削を断念したが、旧河川の流路であったのかもしれない。

出土遺物については、整理箱約1箱が出土しているが、大半が近世以降の陶磁器類である。わずかに奈良時代のものと思われる須恵器片や布目痕を残す瓦片があるが、遺構に伴うものはない。

3. ま と め

今回の調査では、当初許波多神社に関連する遺構が検出されるものと考えたが、それに該当するものはなかった。しかし奈良時代の遺物も若干ではあるが出土していることから、許波多神社以前の遺跡もある可能性は否定できない。おそらく今回の調査地よりやや標高の高い地点に遺跡が広がっているのではないだろうか。

今回調査した木幡東中の北西には、宇治川の旧流路である木幡池や宇治川と山科川の合流点の低湿地帯が広がっており、現在とは土地利用の状況がかなり異なっていたことが考えられる。地元ではかつては調査地付近にまで舟が入っていたという伝承もあり、古代・中世においては旧奈良街道付近にまで低湿地帯が広がっていた可能性がある。

木幡周辺の集落は、近世においてもまだ不明な部分が多い。後述する西浦遺跡の調査成果などから見ると現在の集落の中心より南にその中心があったことも考えられる。今後旧地形の復元も合わせて検討する必要があるだろう。

II. 西浦遺跡発掘調査概要

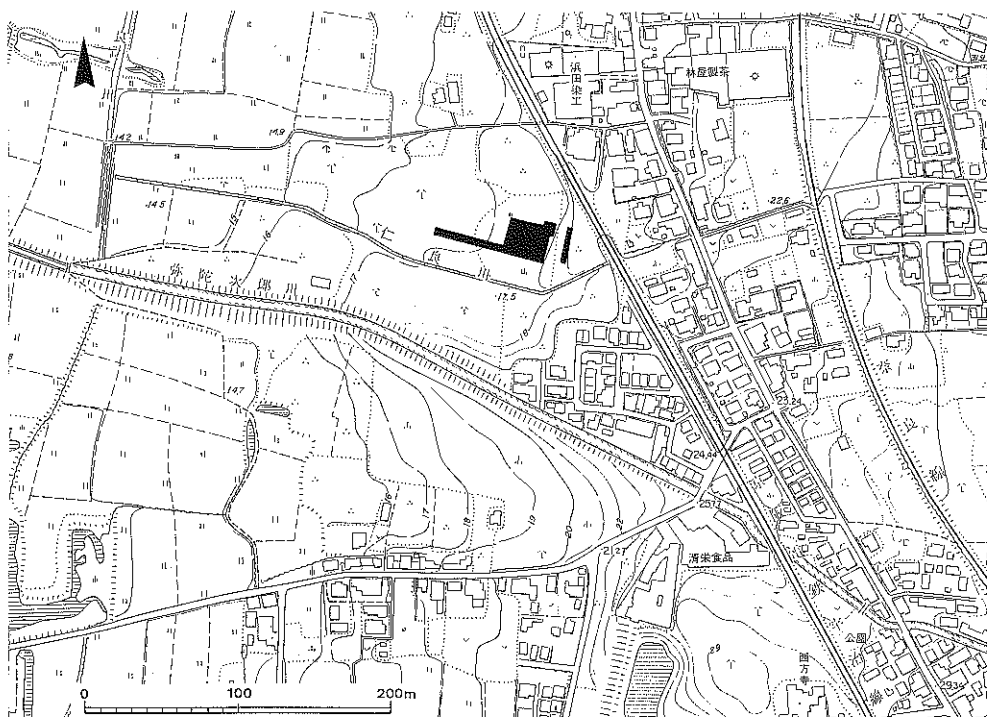
1. はじめに

西浦遺跡の発掘調査は、木幡西浦30番地他において、陸備建設株式会社によって計画されたマンション建設に伴う事前調査として行った。

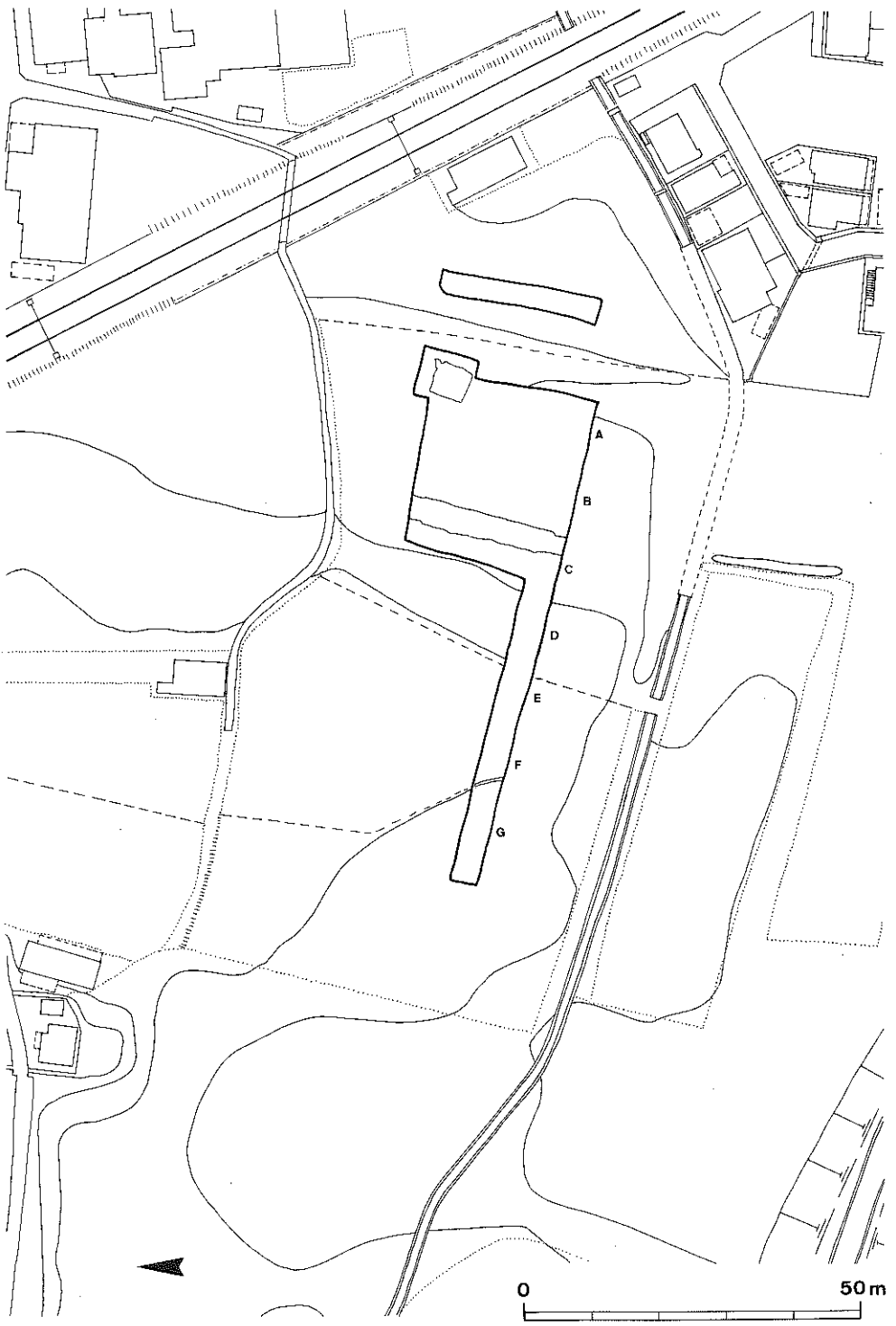
調査地は京阪電鉄宇治線の西側にあたり、調査前の地目は茶畑である。地形的には線路に接する部分が1～1.5mの比高差のある畑となっており、他の部分は北西に向かって傾斜する斜面となっていた。

西浦遺跡は、宇治川の旧流路である木幡池のほりにある遺跡で、須恵器の散布地として知られている。平成2年度には今回の調査地の東側で第1次調査を行っている。この第1次調査では、近世の土壙・ピット・河川の旧流路・足跡などを検出し、近世の陶磁器類が出土している。しかしこれまで採集されていた須恵器などに関連する時期の遺構は確認できなかった。

調査は平成4年7月27日から9月28日まで行い、調査面積は950㎡である。



第3図 調査地位置図 (1:5,000)

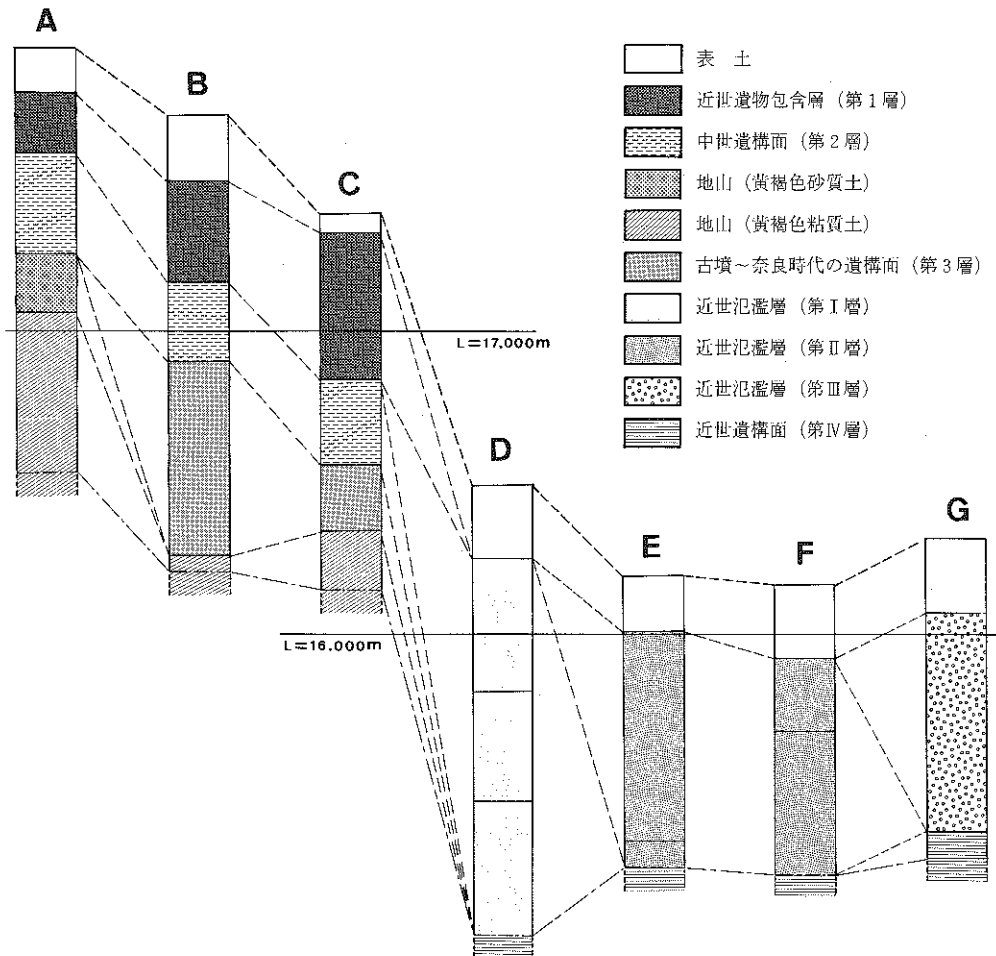


第4図 トレンチ配置図

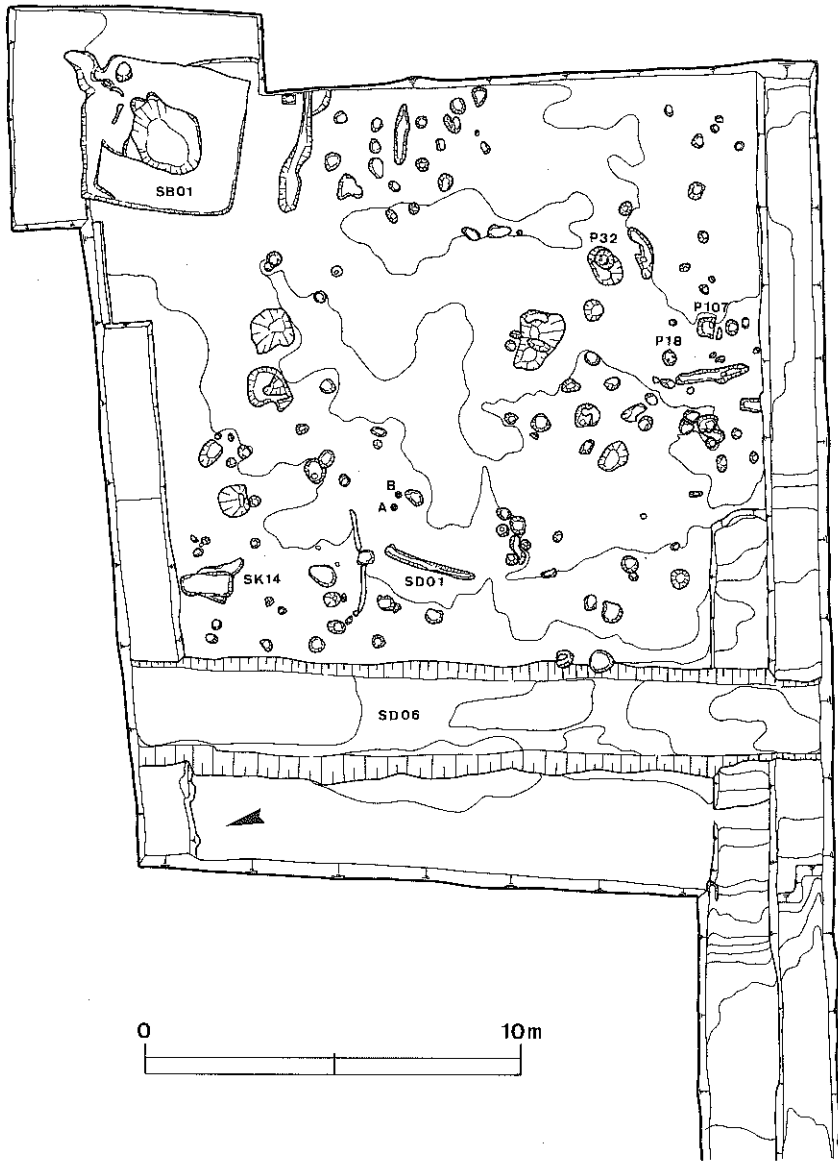
2. 調査の概要

調査はまず遺構の有無を調べるために、幅4m、長さ約73mのトレンチを設定して重機により掘削を開始した。その結果、トレンチ西半については第1次調査と同様の砂層を検出し、一部で暗渠廃水路を検出したものの基本的にはほとんど遺構がないことがわかった。しかし東半においては、黒褐色系の粘質土あるいは砂質土を検出し、遺物も包含することがわかった。そこで調査地の東半部を拡張し、調査を進めることとした。また調査を進める中で遺跡の範囲が東に広がるのが推測できたため、線路ぞいの地点にもトレンチを設定した。

今回の調査で検出した遺構は、古墳時代後期の竪穴式住居、奈良時代のピット群、中世の土壌墓、近世の溝、暗渠、石組溝等である。以下で土層及び各遺構の概要を述べていきたい。



第5図 トレンチ断面柱状図



第6図 トレンチ平面図

A. 土 層

調査地は、北西に位置する木幡池に向かいなだらかに傾斜する緩斜面上に位置しており、南約100mの位置には近世中期以降に付け替えられた弥陀次郎川が流れている。調査地の東側は、低位段丘面、もしくは扇状地の先端であったと考えられ、安定した土層が認められたが、西側では河川堆積層が厚く覆っていた。

東側で認められる基本的な層序は、上層から表土および盛土層、黒褐色土層、黄褐色土層、

II. 西浦遺跡発掘調査概要

そして地山となる黄褐色粘質土層である。第1層の盛土層と第2層の黒褐色土層の間には、トレンチの南東コーナー付近から北西にかけて部分的に黒褐色砂礫層が認められる。この層はトレンチの北西にいくほど厚く堆積しており、堆積の状況、他の層との関係から弥陀次郎川の氾濫の層と考えられる。第2層の黒褐色土層は、その上面で中世の土壙墓 SK14を検出していることから、中世の遺構面と考えられる。第3層の黄褐色土層は、古墳時代から奈良時代にかけての遺構面である。

以上がトレンチ東部で確認された層序であるが、SD06から西側では第2層以下が急激に傾斜して下がっており、東部のような安定した地山は確認できなかった。しかし、地表下約0.9mで比較的安定した暗褐色粘質土層があり、これが第1次調査で確認した近世遺構面に対応するものと思われる。この層の上層には、少なくとも3回にわたる河川氾濫層が堆積している。古い順に、第I層は礫・茶褐色土からなる層、第II層は黄褐色砂質土系の層、第III層は礫からなる層で、これらの層は下位の層を削りながら西に傾斜して堆積している。

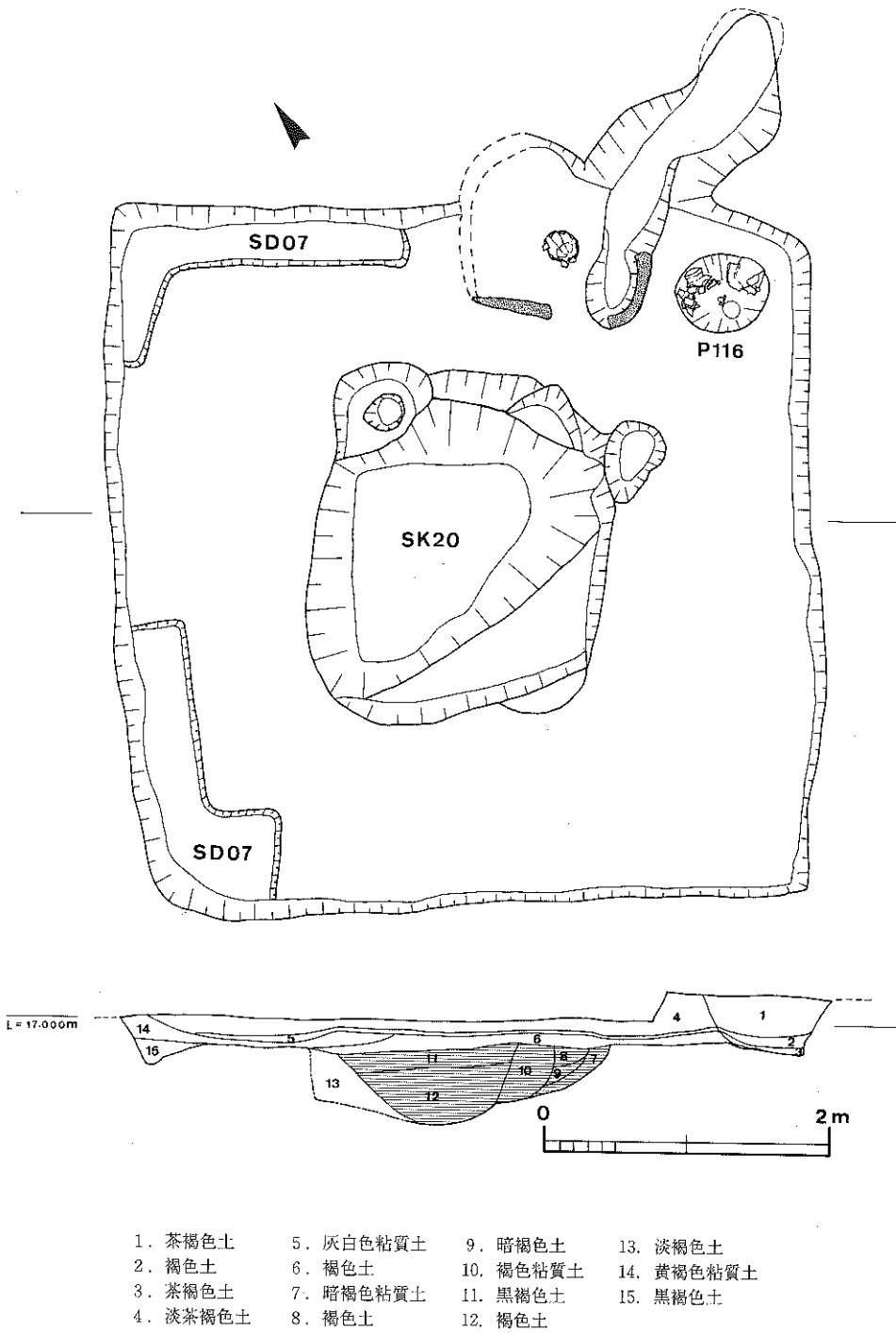
B. 古墳時代

古墳時代の遺構としては、竪穴式住居 SB01、溝 SD01等がある。

竪穴式住居 SB01は、トレンチ北東部の地表下0.4mの黄褐色土層で検出した。東西約5m、南北約5mの正方形プランのものである。壁の残存高は東辺南側で0.3mを測る。壁溝は北西コーナーと南西コーナーで検出した。北西コーナーの溝は、幅約0.5m、深さ約0.1mを測る。南西コーナーの溝も同規模であるため、本来はこの2本の溝が続いていた可能性が高い。床面にはほぼ全面にわたり黄褐色粘土を約3cmの厚さで貼っている。柱穴は検出していない。

また北壁の中央からやや東よりの地点にはカマドを持っている。遺存状態は悪く、わずかにカマドの基底部分と考えられる粘土塊を2か所で検出したのみである。この粘土塊の位置からカマドの形態を復元すると、朝鮮半島の明器カマドに見られるような方形のカマドとなる可能性がある。しかしこの粘土塊は土と粘土の互層になっている部分があり、カマドの上部が崩落した可能性も考えられるため、これをもってカマドの形態や規模を復元するには問題がある。煙道は北東の方向にのびており、長さは約1.3m、幅約0.5m、深さ約0.3mを測る。カマドのほぼ中央の位置からはやや浮いた状態で土師器の長胴甕が出土している。甕の下には支脚となるようなものはなかったが、甕を立てた状態で出土しており、掛け口に掛かっていたものかもしれない。またカマドの東1mの地点で、直径約0.6m、深さ約0.3mの円形のピットを検出した。ここからは土師器の小型甕2点、把手付甕1点、甗1点、須恵器提瓶1点が出土している。出土した土器の内容から、カマドで使用する土器を収納するためのピットと考えられる。

竪穴式住居のほぼ中央には、東西約2.1m、南北約2.5m、深さ約0.7mの不定形の土壙が



第7図 SB01実測図

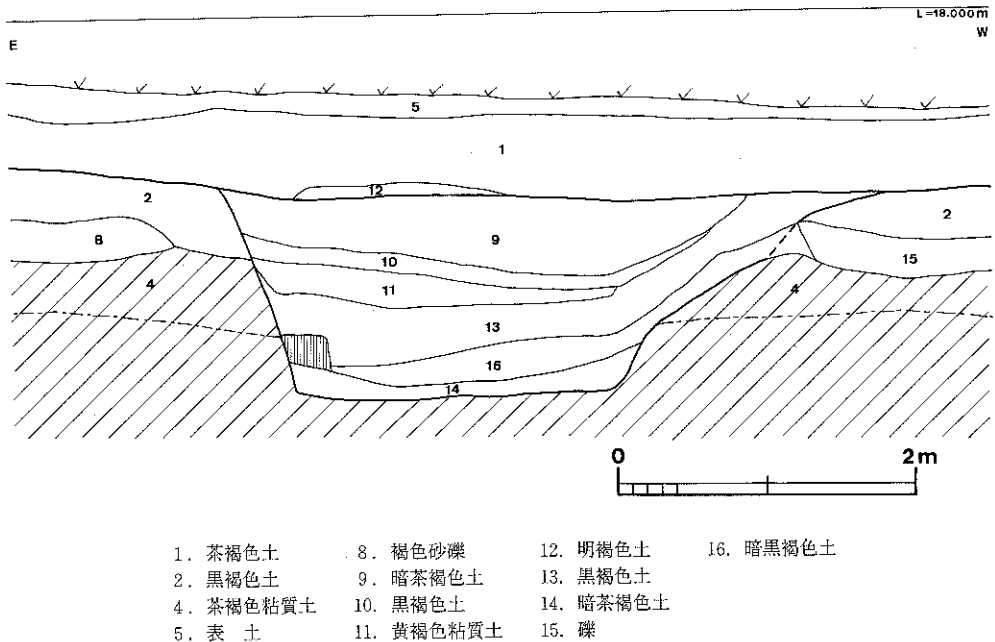
II. 西浦遺跡発掘調査概要

E. 近 世

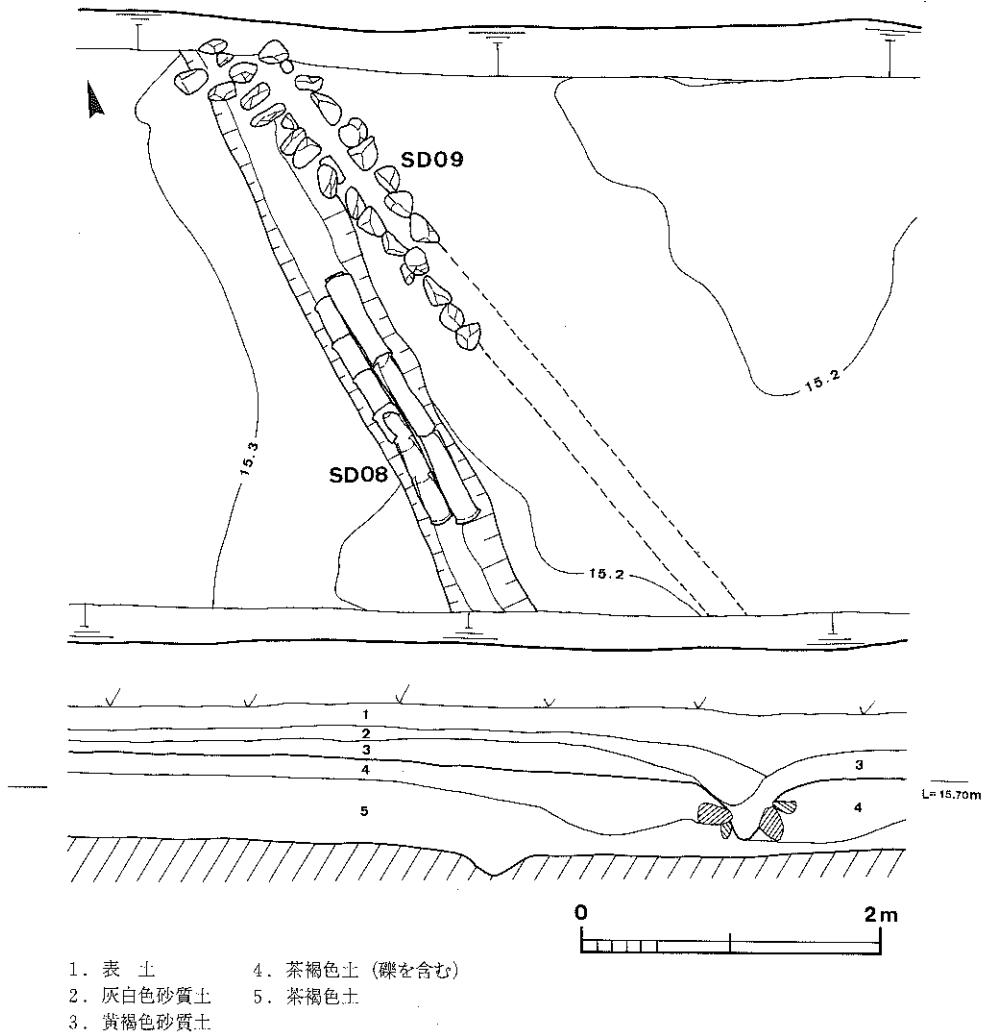
近世の遺構としては、溝 SD06、SD08、SD09がある。

溝 SD06は、トレンチの中央部を南北にはしる溝である。幅は上面で3.3~3.7m、底面で2.3~2.8m、深さは約1.4mである。断面形はU字形をしている。断面を見ると、調査地が東から西へ傾斜しているにもかかわらず、西側からの流れ込みにより溝が埋没していることが確認できた。そのことから、この溝の西側には土塁状の遺構があり、その土塁の土が流れ込み溝が埋没したと思われる。時期については、トレンチ北側の断面で、第1層と第2層の間にある黒褐色砂礫層から掘り込んでいることが確認できたことから、近世中期以降であると考えられる。

溝 SD08は、トレンチ西部に設けられた土管敷設のために掘られた溝である。溝は南北にはしっており、幅は約0.5m、深さは約0.2mである。この溝の中には2本の土管があり、平行に並んでいることから同じ時期に埋設されたものと考えられる。土管には瓦製のものと陶製のものがある。西側に埋設された瓦製の土管は、玉縁部を北側に向け、連ねた状態で出土した。東側に埋設された陶製の土管は、L字形の突出した部分を南側に向け、連ねた状態で出土した。北側については SD09により破壊されているため不明であるが、南側については続いていると思われる。時期については、トレンチ西部に堆積している河川氾濫層が近世中期以降のものであるので、その頃のものであると考えられる。



第9図 SD06断面図



第10図 SD08・SD09実測図

溝 SD09は、SD08の東側で検出した石組みをもつ溝である。この溝は SD08より西に振った状態で検出した。幅は約0.2m、深さは約0.3mを測る。使用されている石材は0.2~0.3mの河原石である。時期については、北側で SD08を破壊してこの溝が築造されていることから、SD08よりも新しいものであるといえる。

3. 遺物

出土した遺物には、古墳時代から近世に至る遺物がある。以下、時代ごとに述べていきたい。

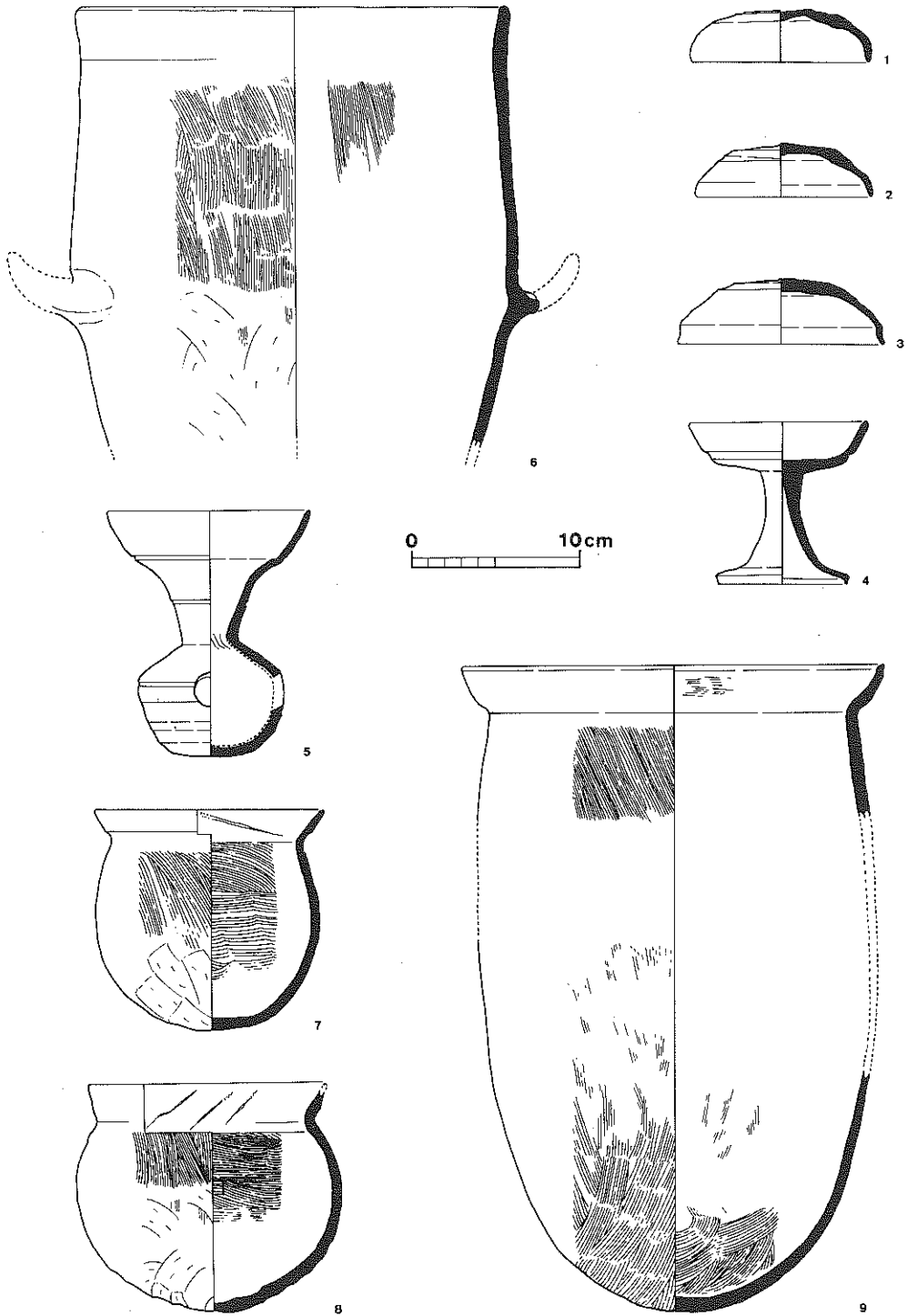
A. 古墳時代

古墳時代の遺物は、SB01から出土した遺物に代表される。いずれも住居跡内の遺構や床面から出土しており、一括性が高い。特にカマド横の収納ピットから出土した遺物は、カマドを使用した煮炊きに使われた土器のセットと考えられ、当時の生活様式を知る上でも興味深い。

このピットから出土した土器には、甑・提瓶・甕がある。甑（6）は底部を欠損しており全容を知り得ないが、体部外面の上半がタテハケ、下半はケズリを施す。三角形の把手を持ち、把手の中心部にはヘラにより切目を入れる。提瓶（14）は大型のもので、タタキの後にカキ目およびヨコナデを施す。肩部には把手をもつ。甕には甕B（13）・小型甕（7・8）がある。甕Bは破片が出土したのみであるが、内外面ともハケの後ナデを施しており、丁寧な作りである。小型甕は体部外面上半はタテハケ、下半はケズリ、内面はヨコハケを施す。いずれも口縁部内面にヘラ記号を持つ。近年宇治市内では、カマドの台として小型甕を使用している例が増えており、この2点もそのために置かれていたものと思われる。

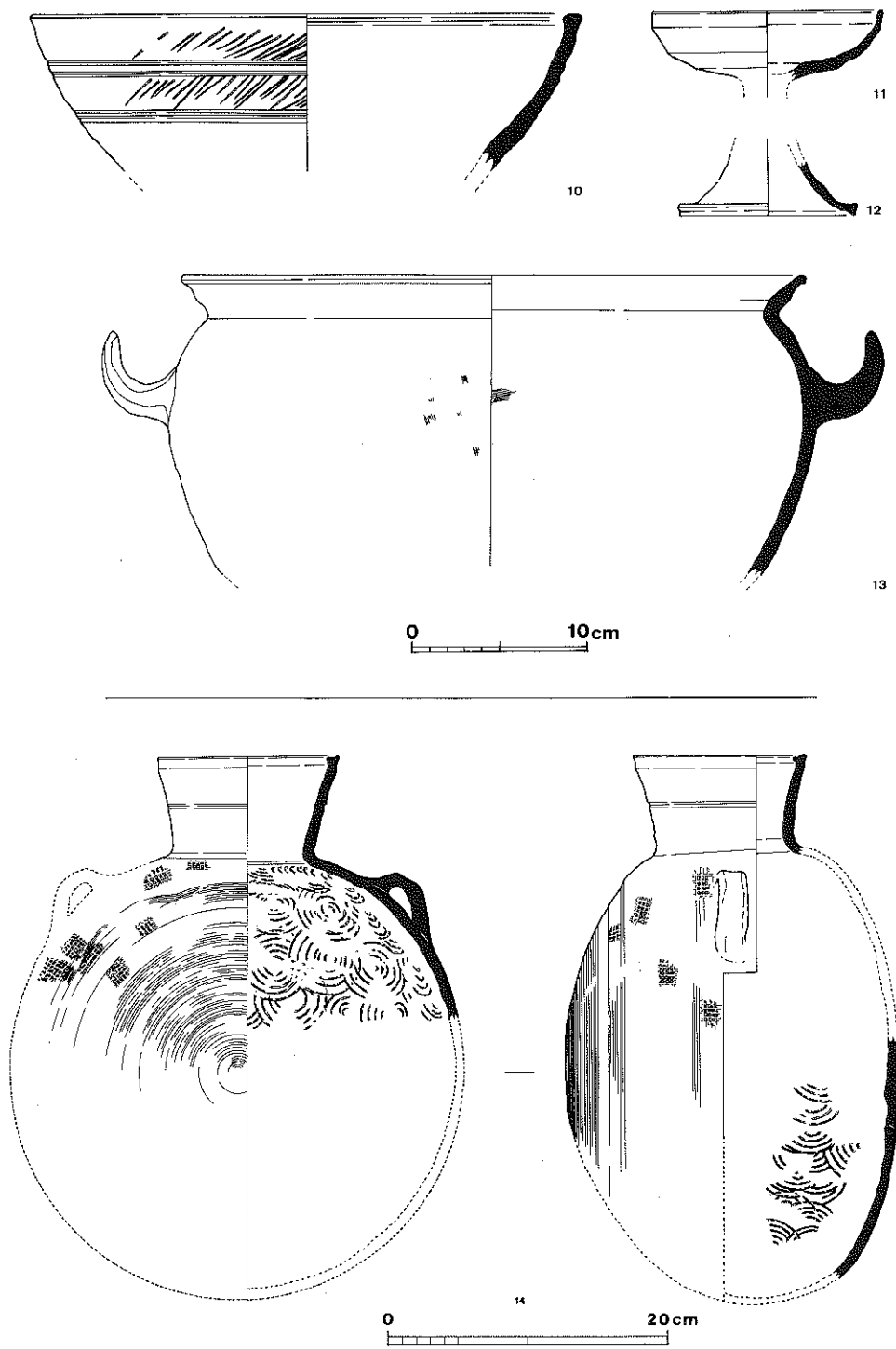
住居跡内から出土した土器はこのほかに須恵器の杯・高杯・甕・器台・土師器の長胴甕がある。杯は3点出土しているが、いずれも蓋である。口径が10.5～12cmのもので、宝珠つまみを持つ蓋は出土していない。陶邑編年のTK209型式の新しい段階、もしくはTK217型式のいずれかが問題となろう。宝珠つまみが共伴していない事を評価すればTK209型式新段階と見るべきであろう。高杯も小型のもので、脚には透しを持たない。甕は平底ぎみの底部を持つ小型の体部を持ち、外反ぎみに立ち上がる口頸部と屈曲してわずかに内湾する口縁部を持つ。口縁の屈曲部、口頸の中央、肩部にそれぞれ1条の沈線を持つ。器台は杯部のみが出土している。外面は2条の沈線で2段に区画し、ハケ状工具によるキザミを入れる。全体に自然釉がかかる。長胴甕はカマド中央からやや浮いた状態で出土した。内湾ぎみの口縁を持ち、内外面ともタテハケを施す。

住居跡以外の遺構では、SD01から須恵器の杯身が出土しており、これも陶邑編年のTK209型式の範疇に入る。また明確な遺構は確認できなかったが、トレンチのほぼ中央で土師器の長胴甕が3個体と小型の甕1個体がまとまって出土している。出土状態から見て本来は住居跡等の遺構にもなっていたものと思われる。また土師器のみの出土のため時期を明確にしがたいが、古墳時代後期の可能性が高いと考えている。



第11图 SB01出土遺物実測図(1)

II. 西浦遺跡発掘調査概要



第12図 SB01出土遺物実測図(2)

B. 奈良時代

奈良時代の遺物で遺構に伴うものは少なく、また細片が多いため図示できたのはP107から出土した須恵器杯身(19)の1点だけである。この他に奈良時代の遺物としては、トレンチ南方で擁壁工事中に出土した土師器の杯Bのセット(20・21)がある。この土器の出土状態は遺構の項で述べたように、埋納されたものである可能性が高く、胞衣壺として使用された可能性を指摘しておきたい。杯(21)は丸みを持つ体部に内湾する口縁を持ち、口縁端部は上方に屈曲する。外面には横方向のヘラミガキを施し、内面は一段放射状暗文とラセン状暗文を持つ。形態的には、一般的な杯Bと異なり、佐波理碗を模した杯Cに高台を付したものと考えられる。蓋(20)は内面にラセン状暗文を持つ。平城宮Ⅱのものである。

C. 中世

中世の遺物としては、土壙墓SK14出土の遺物があげられる。瓦器碗1点と皿4点、鉄刀1点が埋納されていた。

鉄刀(22)は、全長29.6cm、刃部長22.1cm、茎長7.5cm、幅0.7cmを測る。一部に木質が残る。瓦器碗(23)は、口径14cm、器高5.2cmを測る。断面三角形の高台を持ち、外面には暗文を施さない。内面には間隔のあいた暗文を持ち、見込みにはラセン状の暗文を施す。瓦器皿(24～27)は、口径9.2～9.4cmで、見込みに鋸歯文状の暗文を持つ。

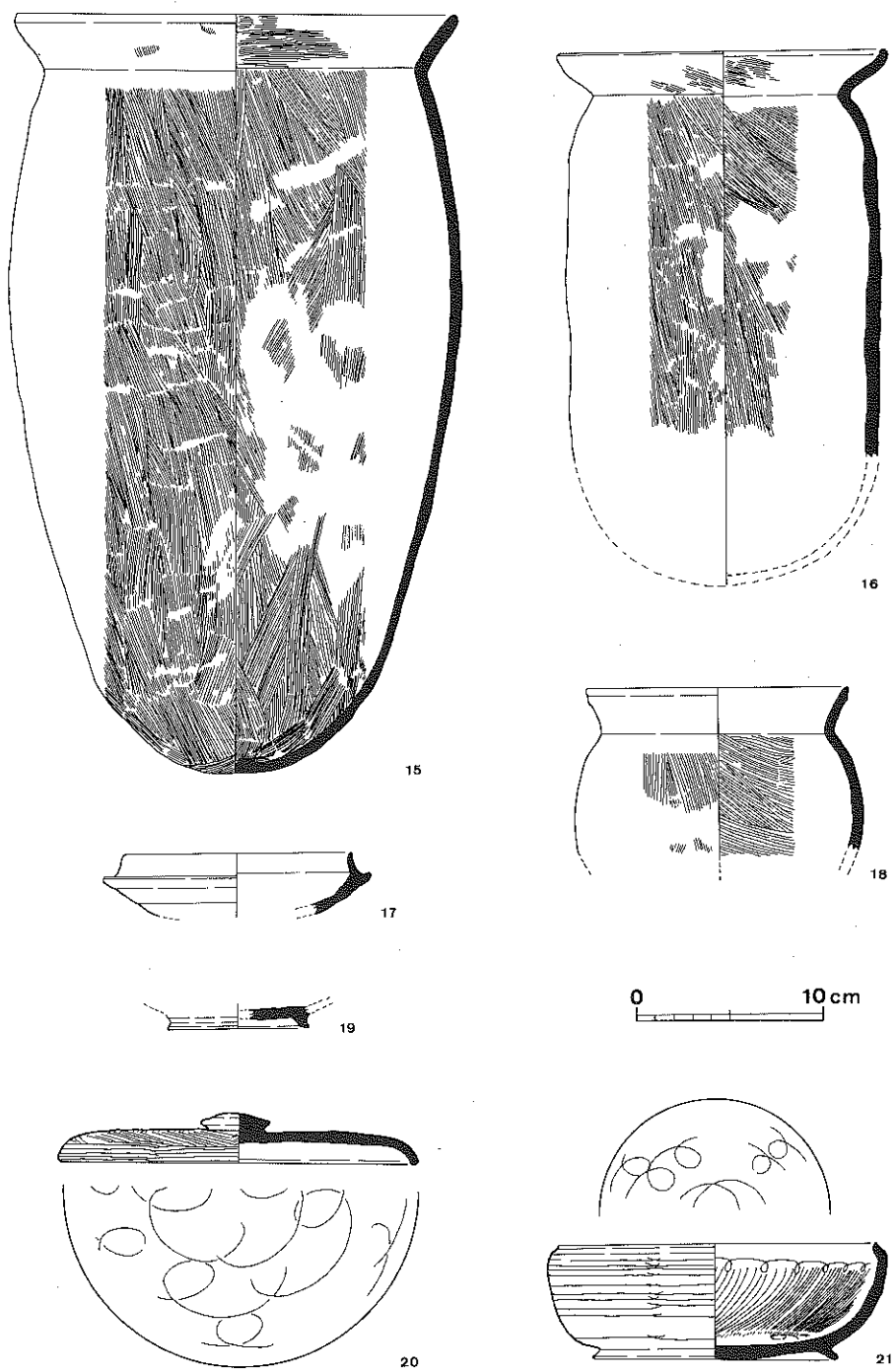
SK14出土遺物以外では、B地点出土の青磁碗がある。遺構に伴ってはいないものの、完形で出土した。口径は15.9cm、器高7.9cmを測る。内面には2単位の草花文を片彫りしており、見込みには文様を持たない。色調はオリーブ色を呈するが、焼成時に釉が沸騰したようで、白色になっている部分がある。横田・森田分類の龍泉窯系青磁碗I—2—¹⁾aにあたり、土壙墓SK14に近接する時期のものであろう。

D. 近世、その他

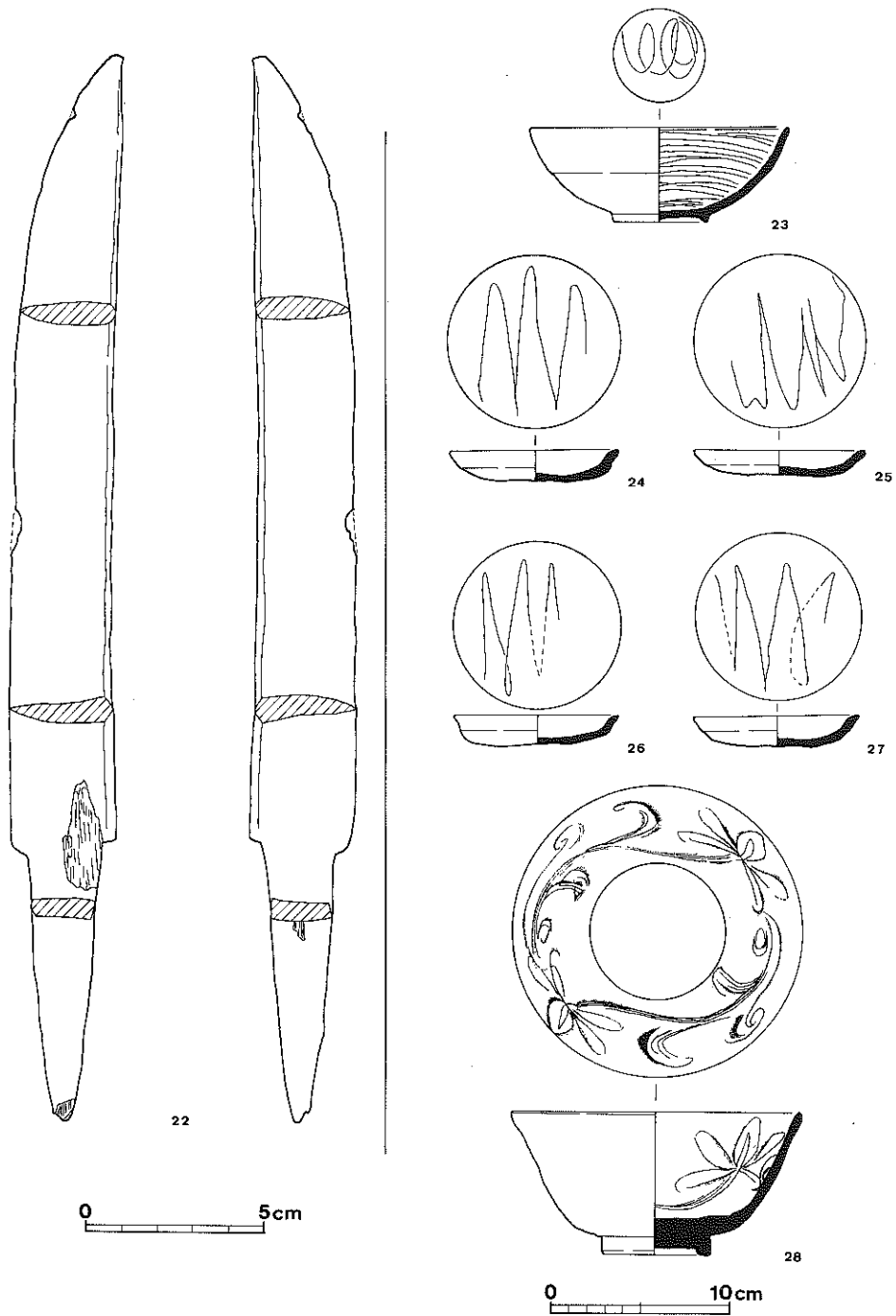
近世の遺物には、SD08から出土した土管がある。信楽焼の陶製のものが3点以上、瓦製のものが6点以上出土している。陶製のものは、長さ60.8cm、受部の口径17.3cmを測る。瓦製のものは、長さ27.3cm、受部径9.6cm、挿入部径14.6cmを測る。外面はミガキ、内面は布目痕を残す。瓦製の類例は、市内では菟道の隼上り遺跡でも出土している。²⁾

このほかの遺物としては、表採資料であるが石器が1点ある。偏平片刃石斧の未製品と考えられるが、他に弥生時代の遺物が出土していないため断定はできない。

II. 西浦遺跡発掘調査概要

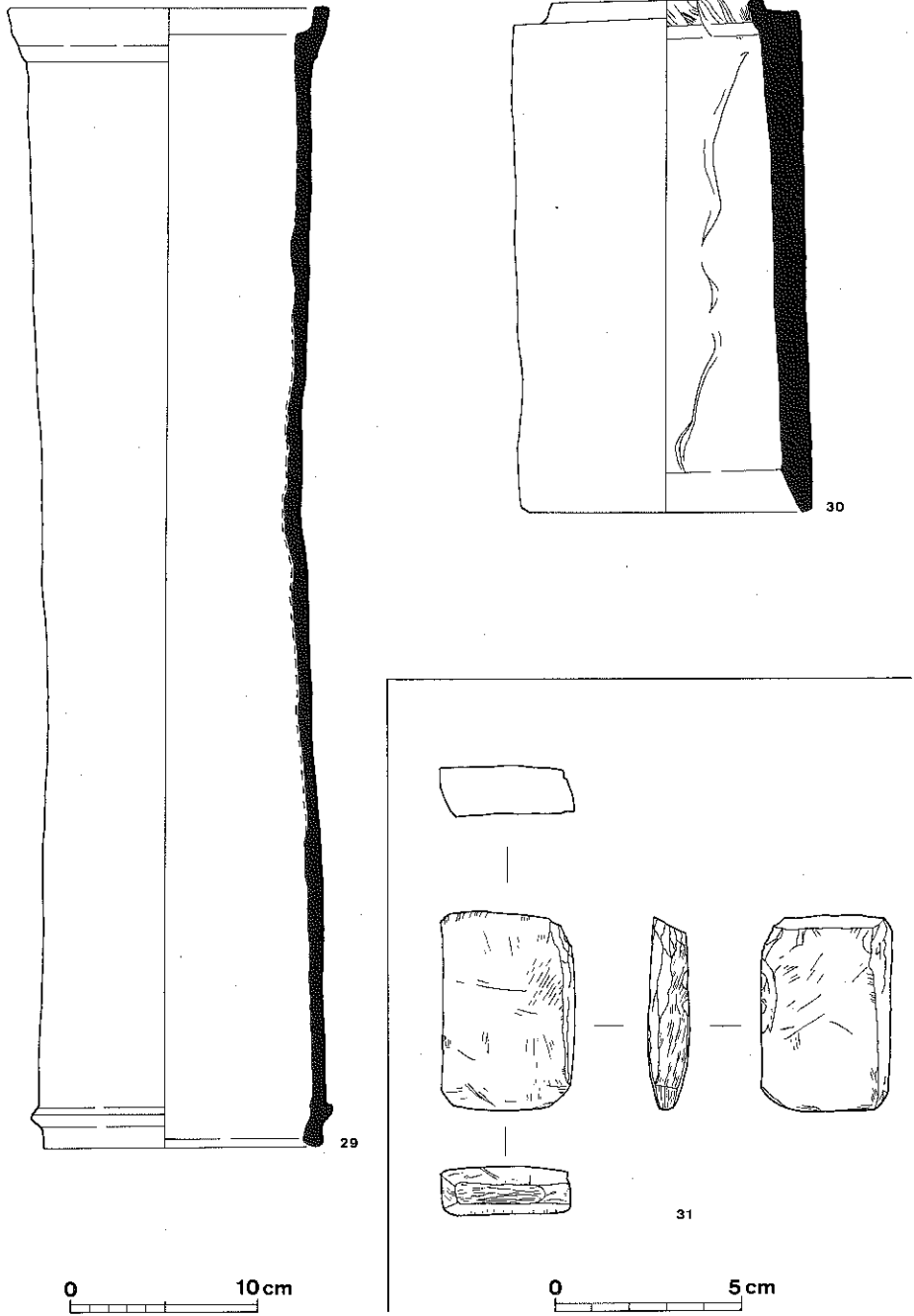


第13図 遺物実測図



第14図 遺物実測図

II. 西浦遺跡発掘調査概要



第15図 遺物実測図

4. ま と め

今回の調査では、古墳時代から近世に至る遺構を検出した。基本的に今回の調査地は段丘の先端にあたるため、各時代とも遺跡の西端部分を確認したといえよう。以下各時代ごとに遺跡の変遷を述べていきたい。

まず古墳時代の遺構としては、竪穴式住居跡1軒を検出したのみであるが、遺物の出土状況などから見るとさらに数軒の竪穴式住居跡があった可能性が高いものと思われる。時期としては6世紀後半から7世紀前半の中のごく短い期間に集落が営まれていたようである。

ここで注意されるのは、調査地の南方約600mの寺界道遺跡³⁾においても、ほぼ同時期に集落が営まれていることである。寺界道遺跡では、出土遺物から古墳時代前期から集落があった可能性が指摘されているが、これまで確認されている遺構としてはほぼ同時期あるいはやや先行するものが多く、中心となる時期が西浦遺跡とはほぼ同様な時期であることは間違いない。西浦遺跡と寺界道遺跡の間には二子塚古墳があり、両遺跡は二子塚古墳を最高点とする丘陵の北側斜面と南側斜面に位置する。このことから西浦遺跡と寺界道遺跡は、二子塚古墳および二子塚古墳の築造以後造墓活動が始まる南山城最大の木幡古墳群と密接な関連を持つものと思われる。

奈良時代には平城宮Ⅱの時期を中心とした遺構を確認した。これらはピット群が中心であり、遺構の検出状況から見ると、何棟かの小規模な掘立柱建物が建つ可能性が高いが、明確にはできなかった。

中世にはいと、13世紀前半を中心に調査地は墓域として利用され、そして近世には土塁を持った溝が掘られる。平成2年度に本調査地に西側で行った調査では、自然流路と江戸時代中期頃の氾濫によって埋没した耕作地を確認しているが⁴⁾、その南側の茶畑に土塁の痕跡が認められ、宅地跡と想定している。このことから溝SD06は調査地南側で西に曲がり、この土塁につながる可能性があり、調査地の東から南に近世村落が展開していたものと思われる。そうすると溝SD06とそれに付随した土塁は、木幡池の氾濫に備えたものであろうか。

今回の調査では、調査地が遺跡の縁辺部に当たるため、全体的には断片的な資料を得たにとどまった。しかし、これまで集落の実態がほとんどわかっていなかった木幡地域において、断続的ではあるが古墳時代から近世に至る集落を確認した意義は大きいと言える。特に古代集落についていえば、前項の木幡神社遺跡の成果と合わせると、中心集落の位置が本調査地付近と木幡赤塚付近の2か所にしぼられることになる。先にも述べたように、木幡古墳群は南山城最大の規模を持つ。この古墳群を支える基盤が木幡地域にあったはずであり、今後の調査に期待したい。

II. 西浦遺跡発掘調査概要

(註)

- 1) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類と編年を中心として—」
『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978。
- 2) 「京滋バイパス関係遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第7冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987。
- 3) 「IV. 寺界道遺跡」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 宇治市教育委員会 1987。
- 4) 「3. 西浦遺跡(西浦50の1)発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第18集 宇治市教育委員会 1992。